

### Ⅲ 分娩に備える

子牛は、母牛の分娩によってこの世に生まれてきます。無事に分娩させることは、母牛の産乳性や繁殖成績の向上だけでなく子牛の増体にもプラスの影響を与えます。

ここでは、健やかに分娩させるために必要なことについて考えてみましょう。

#### 1 分娩に必要な環境

##### (1) ストレスのない環境

分娩施設は、他の牛の干渉を受けず落ち着いて分娩できるように隔離されていることが重要です。

一方で、乳牛は群れを作る動物なので、これまでと違う環境でひとりぼっちにさせられると、ストレスを感じます。そこで乾乳牛群の横など見慣れた環境に分娩施設を設置します（写真2）。

暑すぎたり寒すぎることもストレスです。特に、生まれたばかりの子牛は羊水でぬれており、体温がどんどん外気温に奪われていきます。隙間風などが入らない構造にするなど工夫が必要です。

##### (2) 寝起きしやすい環境

乳牛は、立ったり座ったりを繰り返しながら分娩するため、この時、体をどこかにぶついたり滑ったりしないことが求められます。繋いだ状態<sup>つな</sup>で分娩させる場合は、チェーンを長くしたり、隣の牛床を空けるなどして、スムーズに寝起きができるようにします。

床面がコンクリートの場合、堅くて滑りやすいため、乳牛は寝起きしにくくなります。床面にマットを敷いたり、敷料をたっぷり入れるなど、滑りにくい構造にすることも寝起きをしやすくする上で重要です。

また、分娩前後に低カル<sup>つな</sup>などで起立不能になった場合、自らの体重が体の下側の肢を圧迫し、神経の麻痺に繋がる場合があります。寝起きのしやすさ、神経麻痺の回避の両面から、床面は柔らかい素材であることが望まれます。

##### (3) 衛生的な環境

病原菌に対する抵抗力を持たずに生まれてくる子牛にとって、分娩施設が衛生的であることは必須です。

また、分娩の際に母牛が漏乳<sup>ろう</sup>している場合（写真3）、不衛生な環境だと細菌等の感染によ



写真1 分娩直後の母牛と子牛



写真2 分娩施設へ移動させた母牛



写真3 漏乳

て乳房炎感染の危険性が高まります。使用した分娩施設は、清掃して次の分娩に備えます。

#### (4)分娩トラブルに対応できる環境

分娩前後に発生した起立不能や、難産によるけん引など、分娩時の不測の事態に対応できる施設が望まれます。

起立不能時に備えて、チェーンブロックを用意したり、牛舎新設の場合は、タイヤショベルが入れるような高さに天井を設置します。また、介助に必要な器具類は、分娩施設のそばにまとめておくと、いざという時スムーズに対応できます(写真4)。

さらに、夜間でも点滴などの作業が行えるような照明や、保定できる様な施設にしておくと、不測の事態により対応しやすくなります。



写真4 整然と並べられた介助器具

## 2 分娩施設の例

各種分娩施設について、特徴や留意点を説明します。

### (1)分娩房の場合

分娩房(フリーバーン)は、寝起きの際に体がどこにもぶつからない理想的な施設です。

独房タイプの分娩房の目安は、4m×4m以上とされています。分娩房が乾乳牛群の横にレイアウトされていると、分娩房への移動ストレスを軽減できます。また、乾乳後期の群の一部を仕切って分娩房にすることもできます。

生まれてきた子牛は、リッキングさせる(母牛になめさせる)か、敷料などで胎膜や羊水を拭き取って乾かし、ハッチなどへ移動させます。

### 分娩房

#### A農場の事例 牛舎新設時、乾乳舎内に分娩房を設置

面積：約30m<sup>2</sup>

- 乾乳牛群と隣接するように分娩房を設置。
- 床全面に牛床マットを敷き、さらに麦稈などの敷料もたっぷり入れる。
- 基本的には、1頭ずつ分娩させている。
- 新鮮なエサと水を給与している。

